

高齢化地域逃げ遅れか

東北3県、警察庁まとめ

死者 60歳以上65% 全体の92%が溺死

東日本大震災で、岩手、宮城、福島3県警が11日までに年齢を確認した死者1万1108人のうち、65・2%が60歳以上だったことが19日、警察庁のまとめで分かった。検視の結果、死因は全体の92・5%が「溺死」だった。警察庁は死者の多くが「津波が原因」とみており、高齢化率の高い地域を襲った今回の津波被害の特徴を改めて浮き彫りにした。

津波被害 浮き彫り

3県警は11日までに年齢不詳者2027人などを含め、1万3135人の死者の検視を実施し、収容遺体の83・8%に当たる1万1026人の身元を確認。性別は男性が45・5%、女性が53・6%で、1%程度が判明していない。死因は溺死のほか、津波被害も含む「圧死・損傷死・その他」が全体の4・4%で、「その他の」中でも、津波で流されてあちこちぶつかったこと

による多発性外傷死や、胸部に物が乗って息が詰まったことによる窒息死、寒さによる凍死など、津波が間接原因とみられるケースも確認された。「不詳」が2・0%、震災に伴う火災による「焼死」が1・1%だった。県別で見ると、溺死は宮城で95・7%と非常に高い割合を占めたのに対し、岩手は87・3%、福島は87・0%。岩手は死因不詳が5・7%、福島は圧死などが12・6%と年代とも7%台以下で、比較的多かった。

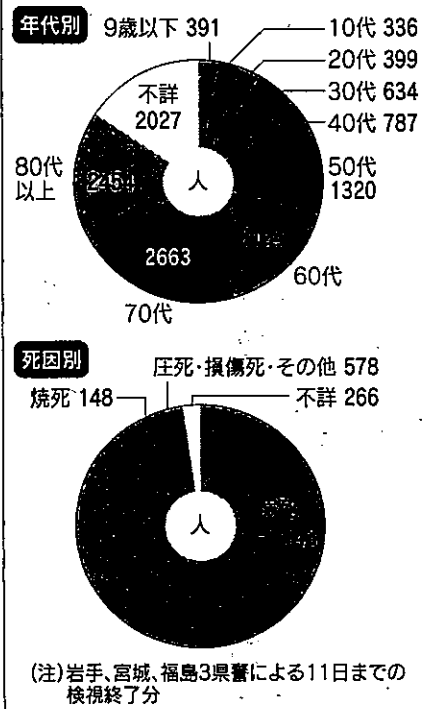
死者の年代については、年齢の判明した死者全体の65・2%に当たる7241人が60歳以上。70代が24・0%と最も割合が高く、50代から80代以上がいずれも11%以上を占めた。40代以下は各年代とも7%台以下で、10代が3・0%と最も低かった。年齢確認した死者のうち60代以上が占める割合は、岩手が66・9%で、宮城が64・1%、福島が67・1%。いずれも沿岸の自治体の人口比率を大きく超す高い割合となっている。

不明1万3000人超、なお増加懸念

東日本大震災の行方不明者は19日段階で1万3千人を超え、発生1カ月後にわずかに減った阪神大震災と災害の形態で大きな違いが出た。不明者の集計に唯一入っていない仙台市は同日になって210人が不明と明らかになったが、なお1千人以上を「所在未確認」として確認中。犠牲者はさらに増えることも懸念される。

死者は所定の遺体安置所に収容した遺体を計らない人のほか、家族ごとに行方不明者について被害に遭って届け出がされていない可能性も残は、所在が確認されていない可能性も残る。一方、身元不明遺体の遅れている福島第一原子力発電所の周辺や、倒壊した家屋などが残る下、海中など手つかずのところが残り、さらに増えることが予想される。警察庁によると、死者は避難指示が出て捜索が

東日本大震災の死者の年代別、死因別内訳



死者は所定の遺体安置所に収容した遺体を計らない人のほか、家族ごとに行方不明者について被害に遭って届け出がされていない可能性も残る。一方、身元不明遺体の遅れている福島第一原子力発電所の周辺や、倒壊した家屋などが残る下、海中など手つかずのところが残り、さらに増えることが予想される。警察庁によると、死者は避難指示が出て捜索が



死者は所定の遺体安置所に収容した遺体を計らない人のほか、家族ごとに行方不明者について被害に遭って届け出がされていない可能性も残る。一方、身元不明遺体の遅れている福島第一原子力発電所の周辺や、倒壊した家屋などが残る下、海中など手つかずのところが残り、さらに増えることが予想される。警察庁によると、死者は避難指示が出て捜索が